アドホックの蓄積

生きられた場所の研究を通した集落移住促進計画

1 生きられた家

母の家　茶の間

生きられた場所のドローイング

哲学者マルティン・ハイデッガーは建てることと住まうことの一致が我々に欠けていることを述べ、のちに多木浩二によって建築家の作品を「生きられた家」に分類された。
「生きられた家」とは、人が経験することによって家（空間）の質が変化する、その変化を捉えた言葉である。「空間が生きられる」とは、そこでの住まい手が空間へ関わることによって引き出される、空間の変化のことである。

本研究では、「家」と「それを取りまく環境」に焦点をおき、空間を形成する部分的な場所を観察していくことで「生きられた場所」を読み解き、さまざまな「生きられた場所」の質の活用方法の新たな姿を自らの想像力で自由に生み出し、運用してしまうような回路をつくりだすことを目的としている。

2 調査敷地：荻窪集落と母の家

荻窪集落

荻窪集落の風景

母の家

どんな古く酷い家でも、人が住む限りは不思議な設備を失わないものである。　— 多木浩二 —

母の家は群馬県桐生市の荻窪という人口１１０人、６５歳以上の高齢者が７０％をためる限界集落に位置する。荻窪集落の多くは農家であり、「建てること」と「住まうこと」が少なからず関わりを持ち「生きられた場所」と感じる部分の多い魅力がある場所だ。
人口が減り続ける今、生きられた家の「不思議な設備」を失わない工夫にも人が住み継いでいく必要がある。

3 生きられた場所の塗り分けと「アドホック」

荻窪集落の風景

母の家の内部

集落の中から、生きられた場所と感じる魅力的なシーンが数多くあり、
そこから結び付きの強いであろう言葉が浮かび上がってきた。
それが「アドホック」である。

建築の要素（柱、梁等）　/　素材の質の読み替えによるもの

↓

アドホック　[ad hoc]

「即興的な」「場当たり的な」といったニュアンスで使われる。
生きられた場所の魅力　- - >　即興的な物事の読み換えと履歴の可読性

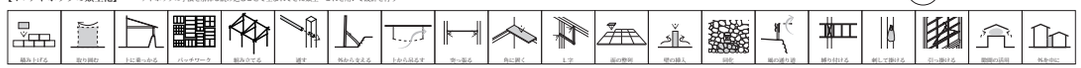
↓

住まい手の生活が空間の中に構造化され、
建築が家具に近づき、素材が家具に近くような " 身体化 " が見られる

4 アドホック解体図表

生きられた場所に現れてくる住まい手によるアドホックな所作を収集し、【０：スケール】【ⅰ：環境の要素】【ⅱ：アドホックな要素】【ⅲ：手段】【ⅳ：目的】に要素を解体して読み込み、生きられた場所を設計手法へと発展させるために【ⅴ：アドホックの類型化】を行う。

【ⅴ：アドホックの類型化】　アドホックの手法を解体し読み込むことで生まれてきた類型　これを用いて設計を行う



5 設計敷地：荻窪集落の風景

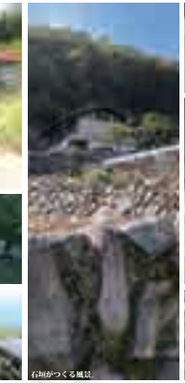
集落を見下ろす、空間斜の大地に古々と建物が並ぶ

豊富な畑

自然すぎるもの（ブロック）

住民によってつくられた道具

50m の高低差がつくる坂の風景



石垣がつくる風景

地形を活用した野菜を干す装置

石垣にのる建物

石でつくられた祠

材料の寄せ集めでつくられた場所

高低差を埋める工夫のフレーム

農業パイプがつくる大きな空間

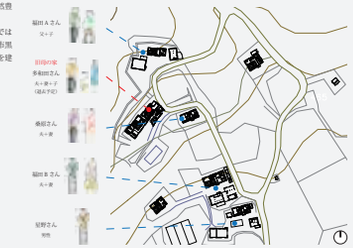
バッチワークのように建具がはめ込まれたファサード

6 荻窪集落の課題

①限界集落と移住促進

荻窪集落は高低差５０ｍの傾斜地にある、自然豊かな場所である。
現在では人口１０人にまで減少し、このままでは消滅してしまう危機にある。そんな中、桐生市黒保根町では「移住促進」のために新たな住居を建設しようとする行政の流れがある。

70% 以上が 65 歳以上の高齢者
↓
限界集落



②広すぎて手に余る土地

土地の所有関係を見ると、集落を回避する道路を挟んで飛び地的に所有している。
飛地先では梅や栗などの果実や、山菜・野菜の畑として使用しているが「広すぎるので手に余る」状態である。

③持て余した建物

住人と建物の関係を見ると、農家がほとんどで１世帯が所有する建物が多い。
しかし、人口の減少と高齢化のために「空き家・あき部屋が増え、建物を持て余している」状態である。

例えば、
福田Ｂさんの家は 70 代の夫婦２人が住んでいるが、母屋の一角と離れの居室は使われていない状態である。

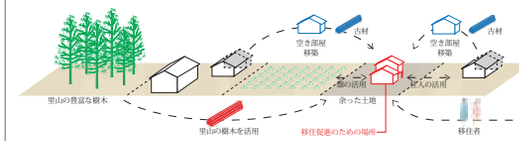
夫婦２人暮らしの
福田Ｂさん（70 代）

離れ２階居室

7 提案①：設計プログラム

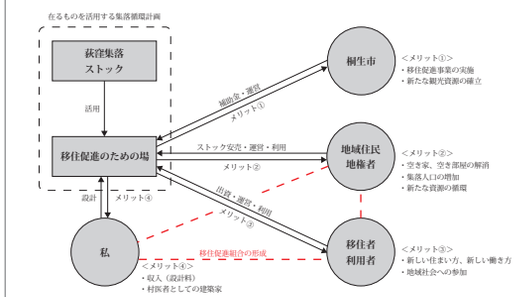
「余ったもの」ではなく「ストック」として捉え直す

" 荻窪集落ストック循環型移住促進計画 "



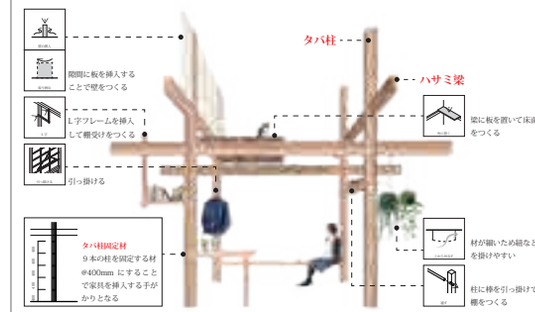
町が進める移住促進事業と連携して、「持て余した土地」や「空き家・空き部屋」、「集落に潜在する要素（里山の樹木、野菜など）を「余ったもの」ではなく「ストック」として捉え直すことで、それらを活用した「移住促進のための場所」を設計していく。

8 提案②：事業スキーム



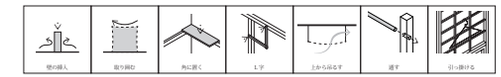
仮定として、私自身が空き家化した母の家に移住し、建築家として本計画の主体となり動いていく。また、地域住人によるマネジメント組織を設立し、各関係者にメリットを生むような長期の事業計画とする。

9 提案③：タバ柱とハサミ梁



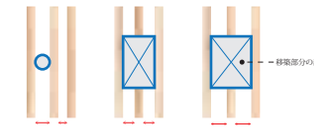
①類型から導かれた、アドホックの手がかりとなる隙間のある架構

空間を構成する柱と梁を細分化（柱９本と梁２本）することで、使い手によるアドホック操作の手がかりとなるようにする。
材料は移築時にできる " 古材 " と " 里山産の木材 " を組み合わせてつくる。

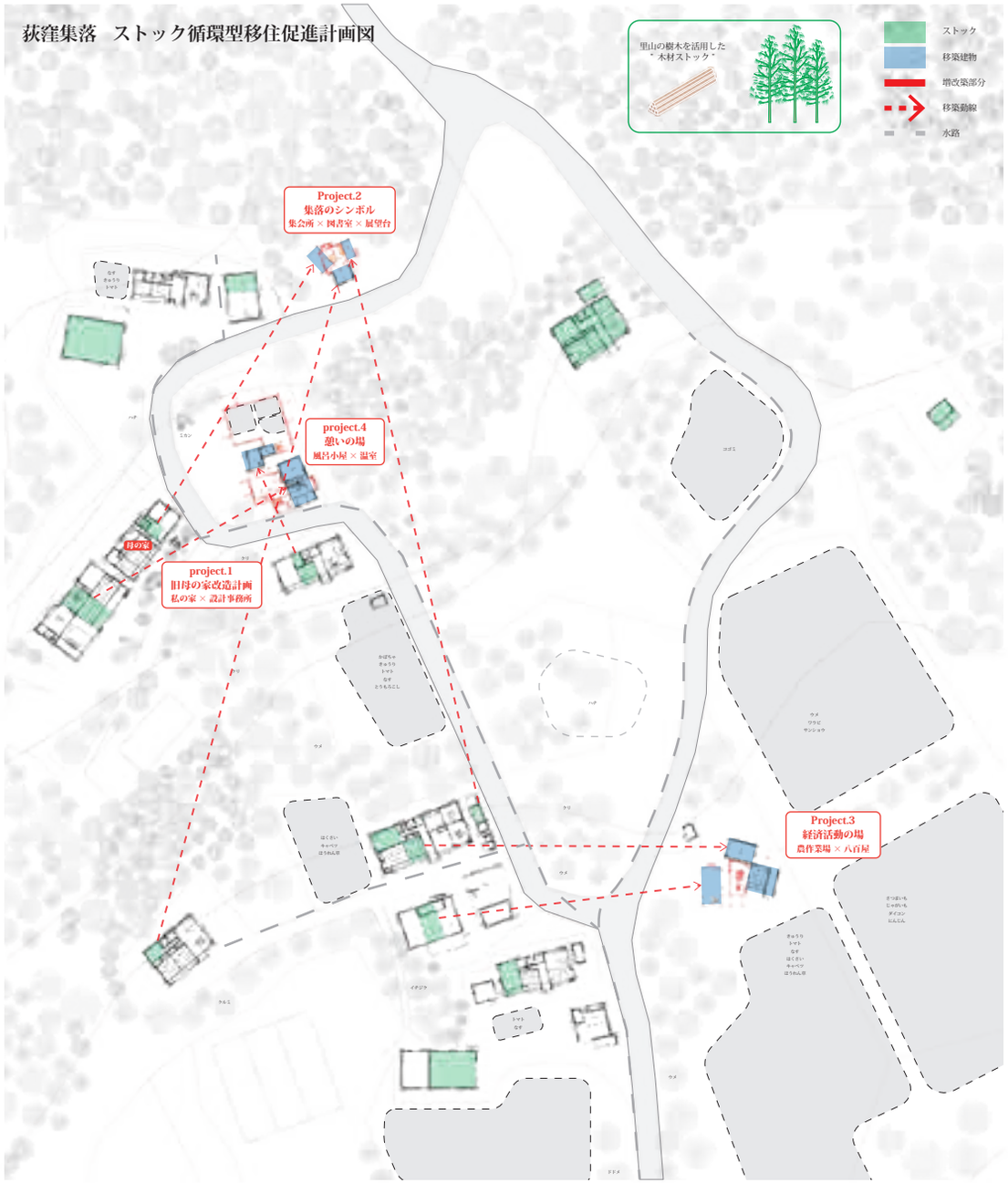


②既存の環境に絡まるアドホックな構造

隙間のある緩い構造が、場当たり的に様々なモジュールの既存の柱や梁を挟むことで、移築部分を補強しながら新たな空間をつくっていく。



荻窪集落　ストック循環型移住促進計画図

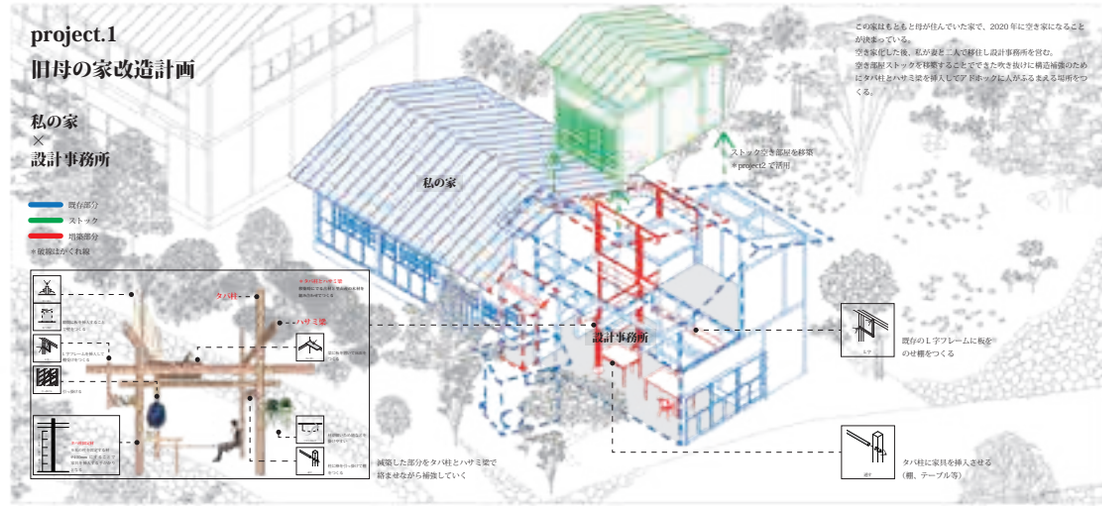


計画の流れ

2020.1	2020.4	2020.8	2021.1	2021.4	2021.4	2021.8	2022.4	2023.4	×××
母の家 空き家化	私の移住	行政 事業との連携	移住促進組合 形成	移住促進計画　実施	project.1 旧母の家改造計画 私の家 × 設計事務所	project.2 集落のシンボル 集会所 × 図書館 × 展望台	project.3 経済活動の場 農作業場 × 八百屋	project.4 憩いの場 風呂小屋 × 温室	next project
	妻と二人で空き家化した母の家に移住し、設計事務所を営む。	集落の状況を調査した私は、生きられた集落を守るために行政の移住促進事業との連携を図る。	ストック循環型移住促進を進めるため住人に話を持ちかけ、協力しあうように組合を形成する。						

project.1
旧母の家改造計画

私の家
×
設計事務所



移築によりできた吹き抜け。タバ柱とハサミ梁で補強する。

改築された屋根。

2階から吹き抜けを見下ろす。

屋外に延長された架構。

既存の空間と新たな空間が混在する。

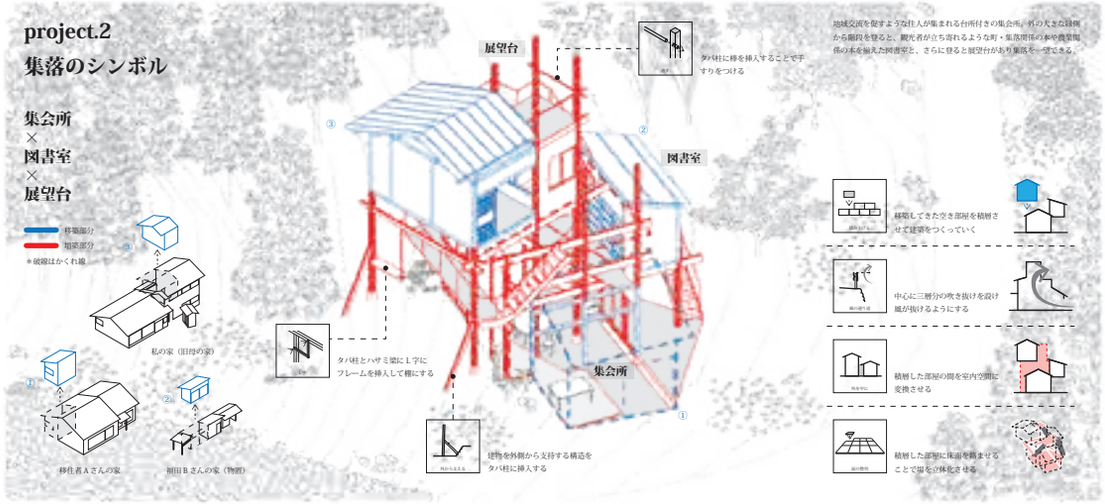
集落住人に開かれた設計事務所。

1階平面図 S=1/200

2階平面図 S=1/200

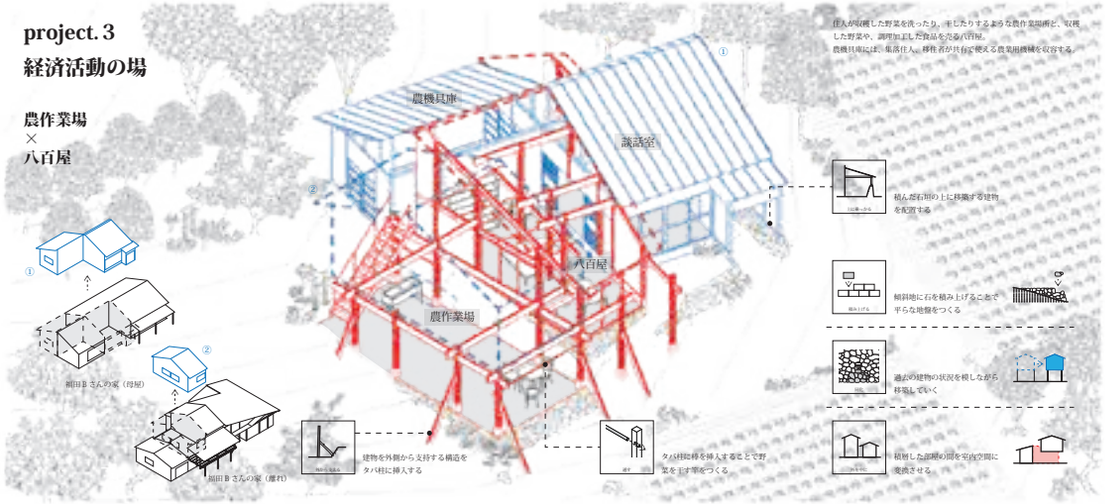
project.2
集落のシンボル

集会所
×
図書室
×
展望台



project. 3
経済活動の場

農作業場
×
八百屋



集落の空き部屋を寄せ集めてできた場所。

タバ柱とハサミ梁がつくる吹抜け。下が集会場、上が図書室。

八百屋を上から見る。

角度の違うタバ柱とハサミ梁を繋げる単管パイプ。

裏の畑へ抜ける通り。石垣が建物を支える。

架構を上台に空き部屋を積み上げる。

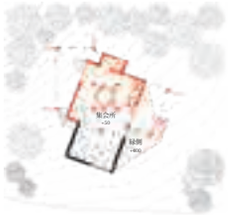
傾斜地に石を積み上げ平らな場所をつくる。

前が農作業場、奥が八百屋。

住人が集まれる台所月の集会場。

建物に巻きついた道を登って展望台へ。

タバ柱とハサミ梁に乗っかる空き部屋。



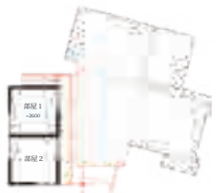
1階平面図 S=1/200

2階平面図 S=1/200

3階平面図 S=1/200

4階平面図 S=1/200

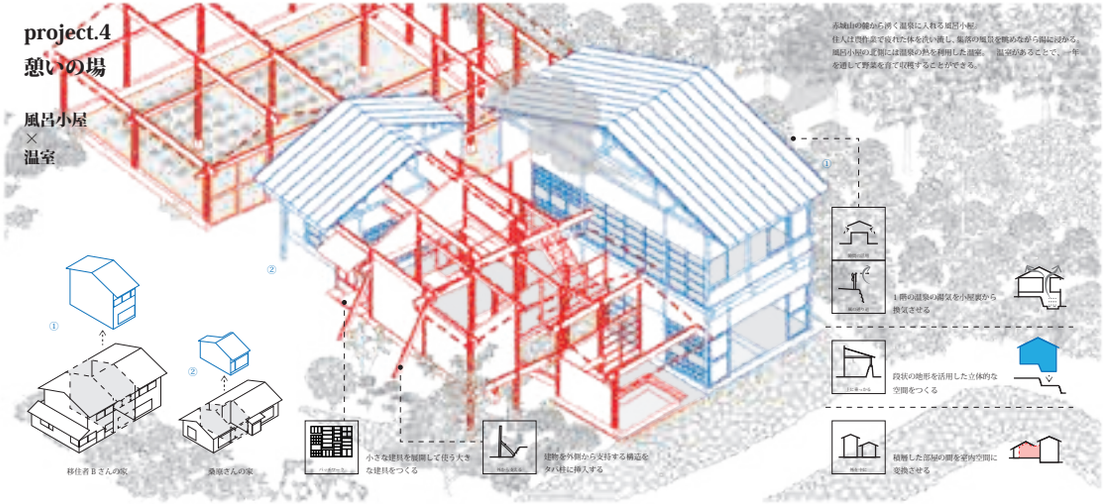
1階平面図 S=1/200



2階平面図 S=1/200

project.4
憩いの場

風呂小屋
×
温室



移築した部屋を繋ぎるように増築していく。

タバ柱とハサミ梁でつくられた、展望の良いラウンジ。

風呂の熱を活用した温室。

石垣でできた段状の地形を活用する。

小さな建具を展開して使うパッチワーク建具。

石垣が室内に現れる風呂。時間で男女入れ替わる。

1階平面図 S=1/200

2階平面図 S=1/200

10 増築の想定

今回計画した建物は、ディテールの先端が伸びている部分が、その後の増築の補助線となるように計画した。この伸びたディテールは増築の手がかりとなるだけでなく、使い手の普段使いのアドホックの手がかりともなる。
生きられた場所の魅力である即興的な既存環境の読み換えが、家具的なスケールから建築的なスケールまで蓄積される。アドホックな読み替えの履歴は、かつての姿や状況を想像する手がかりともなり、過去と現在が混成する「生きられた空間」となる。

11 聖なるものと俗なるもの

建築家の作品（聖）と生きられた場所（俗）が強調し合いながら一緒くたに存在する場所をつくれないか。
タバ柱とハサミ梁は聖なるものとして存在し、俗なるものは期間のある架構に絡まりつくように存在する。聖なるものにアドホック（俗）が蓄積していく。

建築家だけでなく使い手も建築する主体となり空間をつくることを自分たちの手に取り戻せたなら、それは生き生きとした建築や都市を実現させていく方法となるのではないだろうか。